

2 参謀と香川氏の「殉職」

編集委員 望月公一

読み解く



前財務次官の香川俊介氏が58歳で亡くなったのは退任からわずか1か月後の今月9日だった。がんと闘い、直前まで車いすで職務を続けた姿を「殉職」とする声は多い。歴史学者の山内昌之明治大特任教授は「香川俊介氏を哭す」と題した追悼文で、職務に殉じた明治の軍人2人を思い浮かべたと記した。一人は薩摩出身の川上操六。陸軍参謀として日清戦争の作戦を立て、次に対露戦準備に取り組んでいた1899年(明治32年)、50歳で死去した。その後を継いだのが山梨出身の田村怡与造。甲州の名将武田信玄にちなんで「今信玄」と呼ばれ、対露戦を研究したが、日露戦争開戦前年の1903年(明治36年)、48歳で死去。いずれも国が滅ぶかもという緊張感と激務で病に倒れた。

職務に殉じた香川氏の姿を覚えている一人が、松下政経塾出身の神蔵孝之氏だ。神蔵氏は2012年、同窓の野田首相(当時)のブレンとして消費税率引き上げ決定に関わった。香川氏は「総理はあきらめてないか」と神蔵氏に毎晩電話で確認しながら関係者を説得していた。「『国家財政が破綻したら』という危機感で、本当に国のためにやっていた」と振り返る。

山内氏は、歴史を動かす準備をしながら、大業を果たす前に忽然と世を去ったと、

香川氏の死を悼む。香川氏の遺

志を受け継がれ、財政再建が進められることを祈りたい。